世界かんがい施設遺産登録
山形五堰

山形五堰が世界かんがい施設遺産に

令和5年11月、山形市内を流れる「山形五堰（やまがたごせき）」が「世界かんがい施設遺産」に登録された。

山形五堰は馬見ヶ崎川から取水し市内を流れる「御殿堰（ごてんぜき）」「笹堰（ささぜき）」「八ケ郷堰（はっかごうぜき）」「宮町堰（みやまちぜき）」「双月堰（そうつきぜき）」の総称で、総延長は115㎞にのぼる。市街地を網の目状に走る堰は全国的にも珍しいという。登録にあたっては、農業用水に限らず多様な役割を担ったことや限られた水を効率的に利用するための特徴的な「分水ルール」が運用されていたこと、地域が一体となって水源を守ってきた歴史があることなどが評価された。

山形五堰の起源と現在

山形五堰は今年で誕生から四百年を迎える。その昔、馬見ヶ崎川は流れが急なことからたびたび氾濫し、甚大な被害をもたらすため「暴れ川」と呼ばれていた。四百年前に発生した大雨による氾濫をきっかけに、当時の山形城主・鳥居忠政（とりいただまさ）が川の流れを変える工事を行い、城の堀や田に水を引くために作ったのが起源とされる。

現在では水路の多くは地下に隠れる形となったが、山形市内では未だにいたる所でその流れを見つけることができ、市の景観の一部となっている。

Q世界かんがい施設遺産とは

国際かんがい排水委員会（ICID）により創設された、歴史的・技術的・社会的価値のあるかんがい施設を認定・登録する制度。

令和5年11月時点で、19か国161施設が登録され、日本の登録数は51施設で世界一。山形県内の施設では庄内の「北楯大堰（きたたておおぜき）」に続いて2例目の登録となる。

世界かんがい施設遺産
World Heritage Irrigation Structure in Japan

人々の暮らしと心に結びつく「役割」

山形五堰の役割は農業用水や生活用水の供給に留まらず、水車を利用した製粉業をはじめ、養鯉、製紙業や染め物など、産業発展の原動力ともなった。

五堰の水が暮らしに欠かせないものになる一方、川の水位の不安定さから堰の流量を巡る争いも起きた。利用者達はこうした問題に対処するために、沢水の流入や下流での再利用も考慮した分水ルールを生み出したと考えられている。

山形市では現在、山形五堰の歴史と景観、心に安らぎをもたらす親水機能を地域活性化に活かす取り組みが行われている。中心市街地では地下化されていた水路が石積みに整備され、せせらぎが再び姿を現したほか、歩行者の回遊性を高める沿道の整備事業が進む。

四百年にわたり人々の暮らしを支え、寄り添ってきた山形五堰は、これからも形を変えて暮らしに潤いをもたらしてくれるだろう。

山形市の担当者より

歴史ある山形五堰が世界かんがい施設遺産に登録されたことを大変うれしく思います。今後もより一層、その魅力を周知していきたいと考えています。

一方で山形五堰には、水利組合の弱体化や地域の共同活動の衰退等により、維持管理が困難となっている現状があります。

この度の登録を契機として、山形五堰の適切な保全・維持管理に関する意識醸成を図り、多様な団体による、将来に向けた維持管理体制の構築を目指していきます。

馬見ヶ崎川合口頭首工の写真。誕生当時５か所あり、「五堰」の由来にもなった取水口は、現在この一か所に統合。

山形五堰は農業用水路としても現役。100ha 以上の農地に水を供給する。

山形五堰の詳細なマップは農楽里 Vol.16 に掲載。（県 HP で公開中）

山形五堰の見所

八ヶ郷堰の上の「緑町四辻」バス停。市民はごく普通にバスを待っていた。

馬見ヶ崎川の横を流れる双月堰。夏場は家族連れで賑わうスポット。

御殿堰が流れる七日町の水の町屋周辺には、商業施設が立ち並ぶ。

宮町堰沿いの製麺所敷地内に復元された水車。サイズは 2.5 分の１。

水の町屋の上流側。のぞきこめば五堰の「素顔」が垣間見える。

その他の見所は山形市のＨＰから！